

# 第 2 章

## 商人と両替・ お金持ちへの道



描かれた  
**江戸の商人**  
販促ツールと商いの秘訣

## 商人と両替

江戸時代の江戸・大坂・京といった大都市や、城下町・宿場町などの人の多く集まる場所には両替屋が多く存在しました。両替屋は、宿屋などそれ以外の商売を兼ねることもありました。

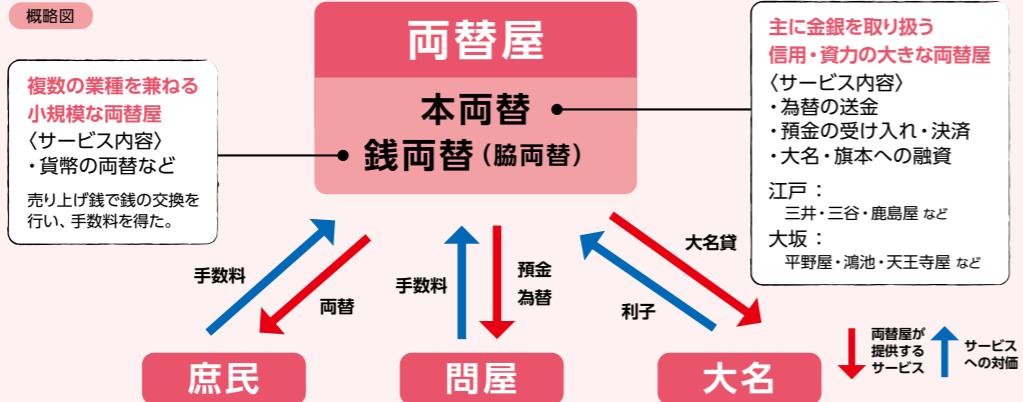


「銭小うり」看板のある両替屋

初代歌川広重「順慶町夜見世之圖」「浪花名所圖会」

順慶町(現・大阪市中央区)の夜店には、衣服、道具、瀬戸物、仏具などの商品が並び、多くの人が賑わっていた。その様子は、「凡十町許の間両側尺地の透間もなく夕ぐれより店をつらね万灯をてらしのくさぐさを飾りて商ふ」(『摂津名所図会成』)と記された。

店の立ち並ぶ風景の左奥に、「銭小うり」の看板がみえる。  
人々の往来が多い町には、小銭への両替を行う商人がいた。



## 描かれた両替屋



風刺画に描かれた両替屋

秋人小丸「銅錢争い図」

両替屋の店内では、中央の番頭と右端の小僧が、江戸時代末期の銭相場の混乱に困って嘆いて嘆いている。



銀貨のうち秤量銀貨である丁銀・豆板銀は、天秤と分銅を用いて計量した。両替屋で用いられた天秤と分銅は常に正確さが求められた。

左側に両替屋、右側には大晦日の掛け取りを振手形で支払うために両替屋へ銀貨を預け入れる商人の様子が描かれている。





### 「銅錢争い図」の両替屋のセリフは…

困っている両替屋の番頭と小僧の周りでは、銭貨たちが看板の下に書かれた相場に対して、日々に文句を言いながら騒いでいる。右奥の部屋にいる金銀貨たちは、その様子を腕組みをしながらみている。



### 看板のかたち一分銅

両替屋の看板に多くみられる分銅のかたちは、中央にくびれをもつ分銅をかたどっている。分銅は、重さごとに50両から1分に至る19種類が使われた。分銅は、秤とともに正確さを求められ、大判座後藤家が製造、市中の分銅への検印まで一手に担った。



959230~959248

(二分金)  
今迄はごろつきなんぞには  
口に含まれ、そ  
の上にふんどしへくるまれ、よ  
うようあの手を離れてます  
すありがてへて

分銅型の看板の下に  
書かれた相場には、金  
一両が銭十貫八百文  
とあり、銭貨に対して  
金銀が高値になって  
いる

(三分金)  
こう高値のいこう(遣)  
想)は恐ろしからう

(天保當百錢)  
ぜんてい、あの看板が  
氣に入らねえハ  
り増長しやあがる…

されただのそっくりだのと  
好きなことを言われ…

とくんざり

に馬鹿だのそっくりだのと  
好きなことを言われ…

わたくしらにはもう  
さっぱりわからぬか  
ら困ります

番頭さん

このように銭相場が  
たいたしだやア  
わたしらにはもう  
さっぱりわからぬか  
ら困ります



### 量って使う銀貨 丁銀・豆板銀・包銀

江戸幕府は、1601年に慶長丁銀・豆板銀を発行し、その後も重さ(単位:匁)によって価値をはかる秤量銀貨を発行した。18世紀後半より、幕府は秤量銀貨を回収し、もともと金貨の単位であった両建ての計数銀貨を発行するようになったこともあり、幕末には匁建ての秤量銀貨は殆ど流通しなくなった。



分銅形 961045、寛永通宝形 961038

### 遠目でもわかる 両替屋の看板

分銅と寛永通宝の形をした両替屋の看板。両替屋の店頭には、分銅や銭の形をした看板や、長方形の板に「金銀両替」などの文字や屋号を記した看板が掲げられた。



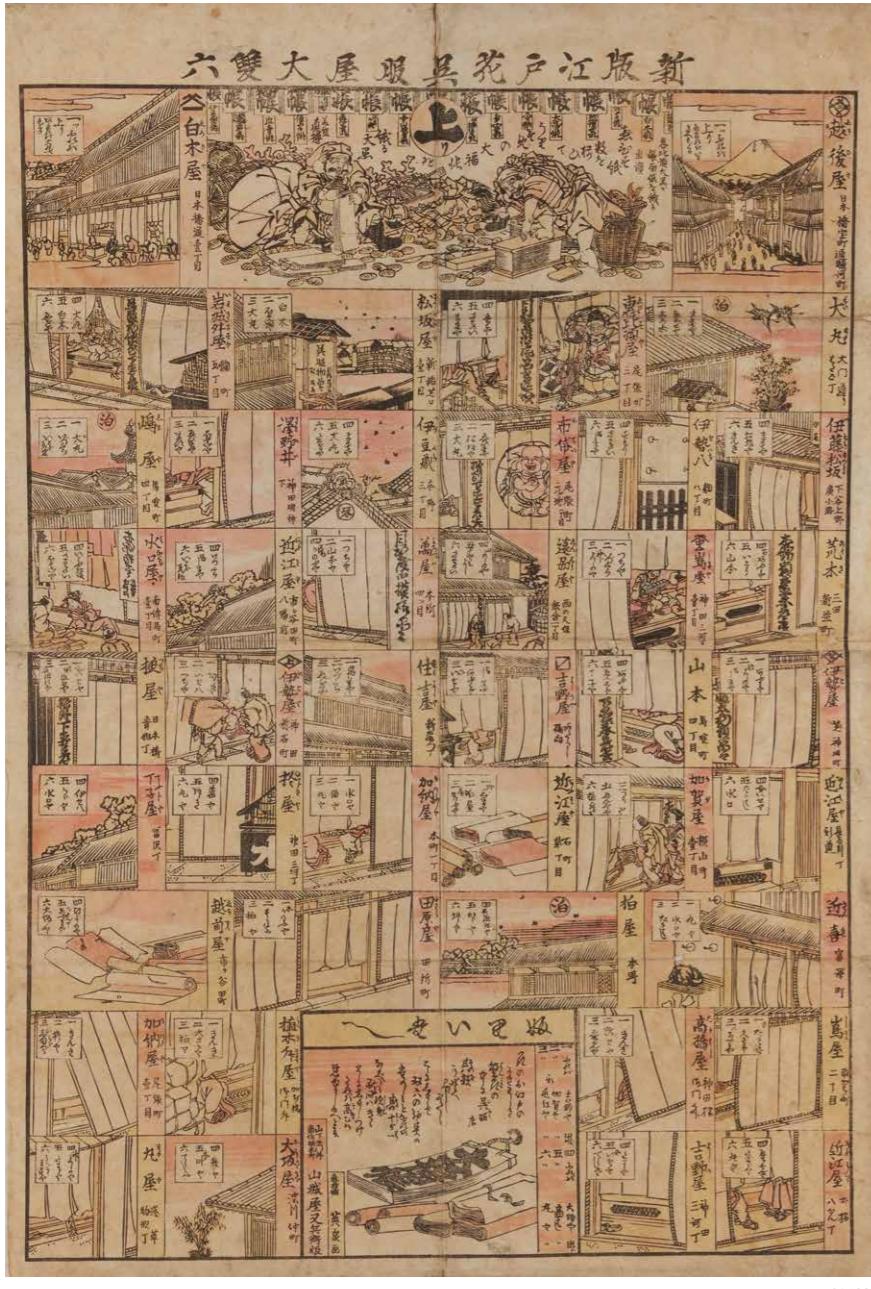
### 正確な計量が信用をつくる 天秤

重さを量って使う丁銀・豆板銀の両替や、それらを包銀にする際、両替屋は天秤と分銅で計量した。

台のなかに、針口(秤・皿)・  
鳥居・小槌が収納できる。

# お金持ちへの道

江戸時代、商人として成功したお金持ちは、出版物などを通して人々に知られる存在となっていました。呉服屋の双六や長者番付などから、人々のお金持ちへの興味がうかがわれます。



双六で巡る江戸の呉服屋

溪斎英泉「新版江戸花呉服屋大雙六」

江戸時代後期の420の呉服屋を題材に描かれた双六。

上段には、「白木屋」「越後屋」「大丸」など、長者番付に掲載のある店名が描かれている。

(上段)2段目 左側より



岩城升屋

麹町五丁目



松坂屋

新橋芝口一丁目



恵比須屋

尾張町三丁目



大丸

大門通はたご町



白木屋

日本橋通一丁目



越後屋

日本橋室町通駿河町

白木屋 日本橋通 一丁目	越後屋 日本橋室町通 駿河町				
岩城升屋 麹町五丁目	松坂屋 新橋芝口一丁目	恵比須屋 尾張町三丁目	大丸 大門通りはたご町		
島屋 馬喰町 四丁目	澤野井 神田 明神下	伊豆藏 本郷 三丁目	布袋屋 尾張町元地 一丁目	伊勢八 麹町 八丁目	伊藤松坂 下谷 上野広小路
水口屋 南伝馬町 一丁目	近江屋 市ヶ谷田町 八幡前	万屋 本所四ツ目	遠州屋 西の久保飯倉 一丁目	島屋 神田三河町 一丁目	荒木 三田新並町
槌屋 日本橋青物丁	伊勢屋 神田新石町	住吉屋 新右衛門丁	吉野屋 あたらし橋向	山本 馬喰町 四丁目	伊勢屋 芝神明町
丁子屋 富沢丁	桟屋 神田三河町	加納屋 本町一丁目	近江屋 石町二丁目	加賀屋 横山町 一丁目	近江屋 長谷川町 邪道
越前屋 市ヶ谷田町	田原屋 田所町	柏屋 本町	柏屋 本町	近喜 富澤町	
加納屋 尾張町 一丁目	植木升屋 加賀橋 御門外	高橋屋 神田橋御門外	島屋 南かち町 二丁目		
丸屋 浅草駒形丁	丸屋 深川仲町	ふりだし	吉野屋 神田三河町 土橋八かん丁	近江屋 土橋八かん丁	

## 日本橋周辺の主な呉服屋

日本橋周辺には、越後屋・白木屋のほか、中小規模の呉服屋が多かった。

また、呉服屋は神田や京橋・銀座方面にも数多く存在した。



## 日本一のお金持ちは誰だ?



900675

町人の長者になる夢 出世双六

歌川芳藤「長者出世双六」

商人や医者・儒者など町人の出世の過程を描いた双六。  
この双六では、商人は「手代奉公」から「大問屋」を経て「長者」になっていく。  
「隠居」は、長者から隠居料を取ることが記されている。  
山積みの銭さしが描かれた「銭屋」、天秤が描かれた「両替」なども見られる。最下段には家屋敷を抵当とする借金「家質」が包金や小判などと描かれている。

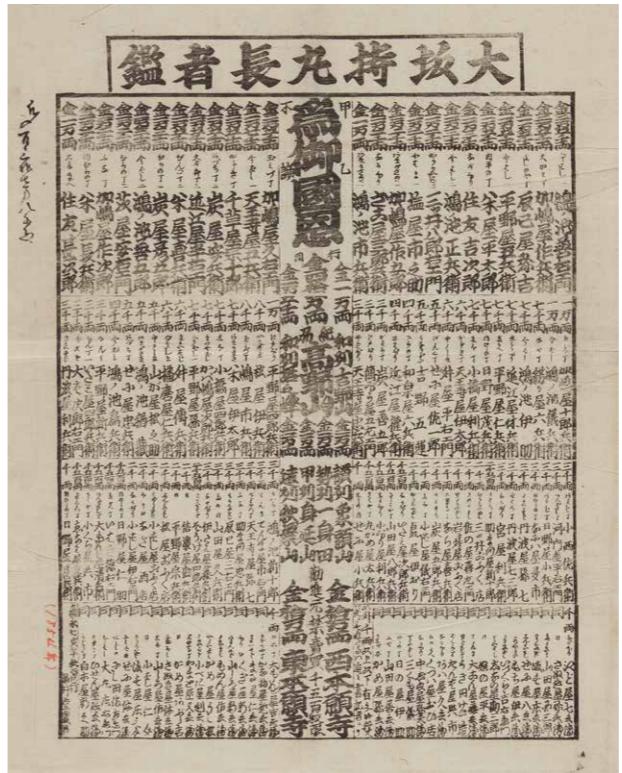


### 絵双六の種類

- ① サイコロの目の数だけ進む「廻り双六」
- ② サイコロの目の数の指定のコマに移動する「飛び双六」
- ③ ①②の特徴を兼ねた「飛び廻り双六」
- ④ ふりだしでコマの進む経路が男女や善悪などで別に分ける「振分け双六」

絵双六は、浄土双六(仏教の教えなどのテーマ)から始まり、道徳や教訓を伝える要素があった。

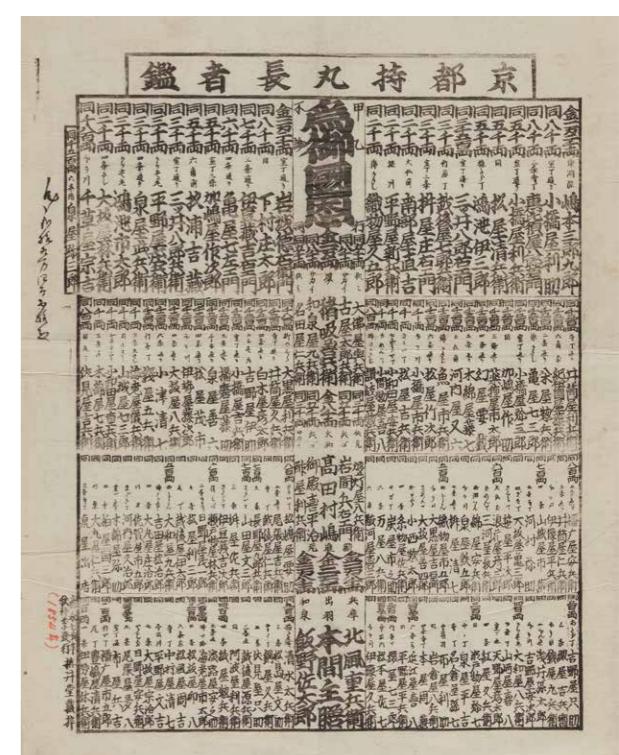
江戸時代には、出版文化の広まりとともに様々な絵双六が生まれ、正月の遊びとして定着していった。



911987

大阪持丸長者鑑

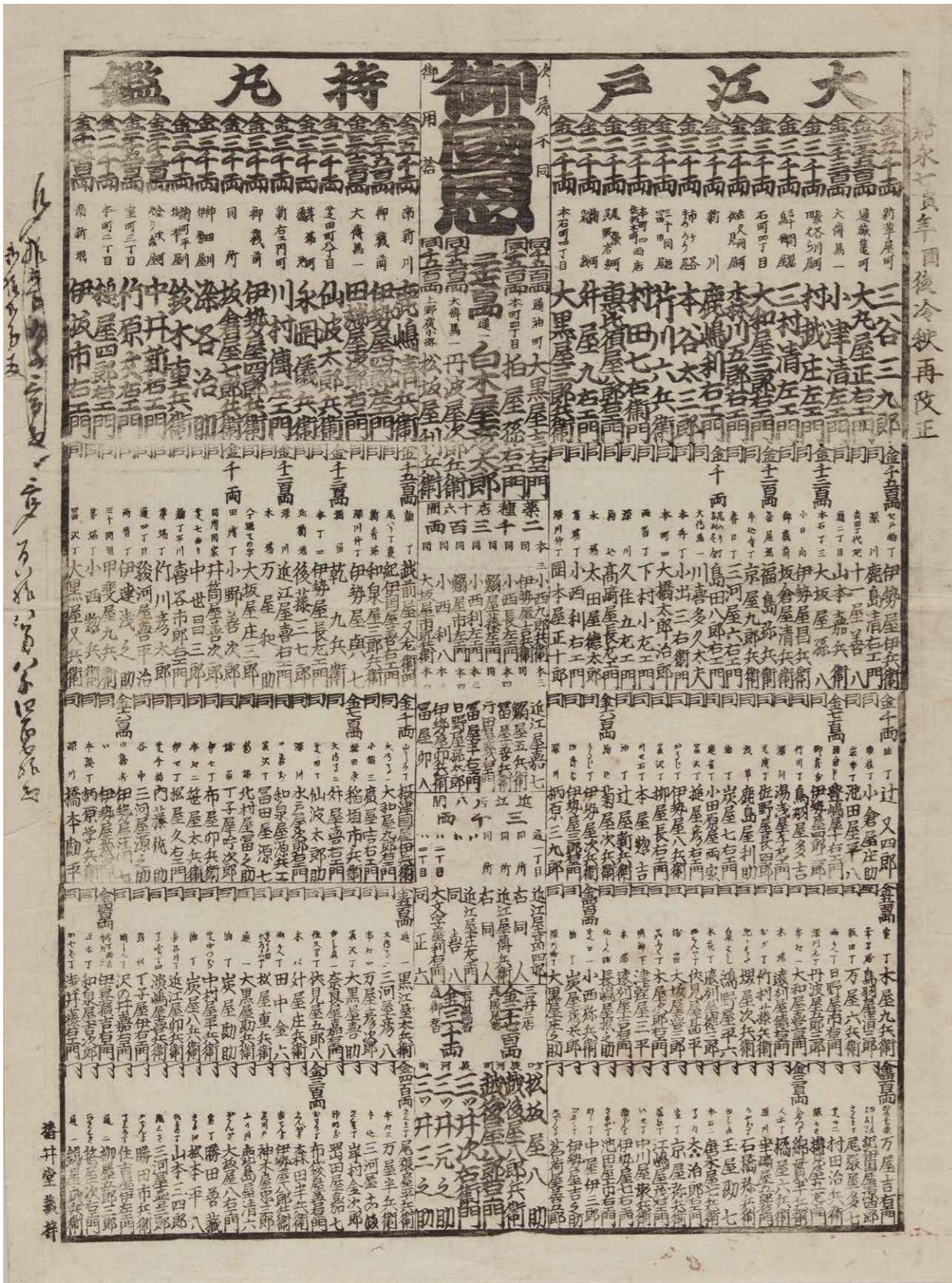
1854年



911988

京都持丸長者鑑

1854年



911986

## 江戸の長者番付

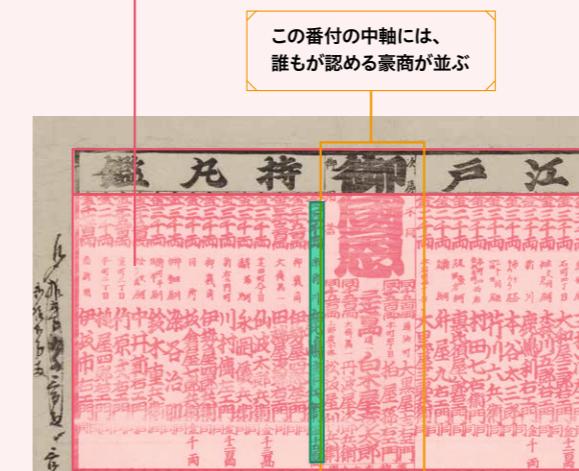
相撲の番付表のように、様々なものに序列入をつけた「見立番付」  
「見立て」とよばれる一覧表が、江戸から明治時代にかけ流行した。

## ▼日本橋周辺の豪商

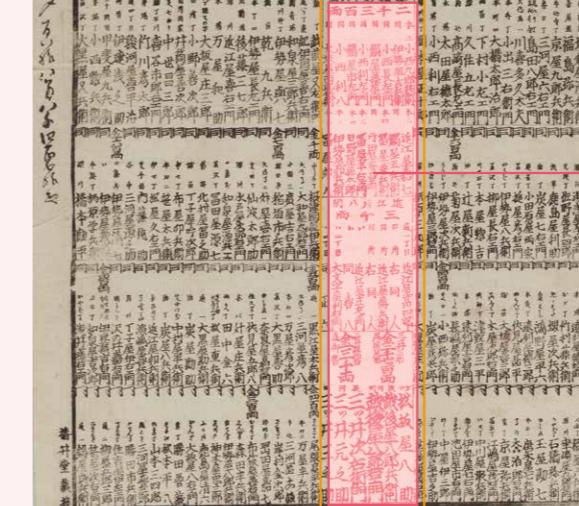
1878年 郡区町村編制法による  
「日本橋区」の範囲

## 番付のトップ

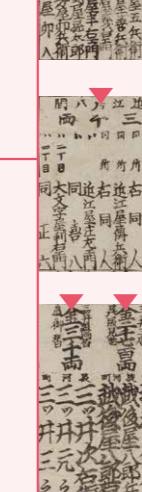
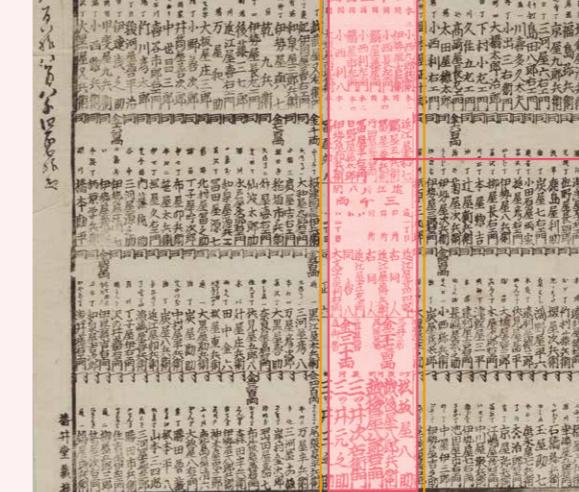
江戸:両替屋 三谷、下り酒問屋 鹿嶋  
※両替屋はいずれも大名貸で財をなした。



この番付の中軸には、  
誰もが認める豪商が並ぶ



中央には日本橋の大店、  
・本町に軒を連ねていた  
数々の葉問屋  
・通町の畠表問屋(近江屋)  
・駿河町の三井呉服屋  
(越後屋)、両替屋  
が挙げられている。



番付のタイトル

東/西それぞれ  
右上から格付け



912014

### 役者の人気ランキング 諸商人見立評判記

「當ル午の顔見世 諸商人見立評判記」

当時の歌舞伎役者を商人に見立てランク付けした刷物。

《見立ての例》

- ①高嶋屋市川小団次 が 米問屋「高嶋屋米舛」に（「大極上上千両」）
- ②大和屋岩井糸三郎 が 絵草子屋「大和屋燕子」に（「大上上吉九百五十両」）



①

②



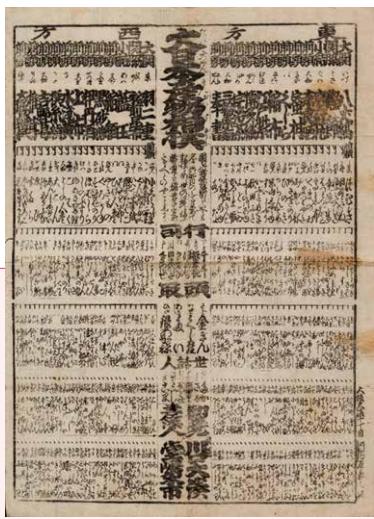
900515

### 長者たちの対決 東京家宝力競

守川周重「東京家宝力競」明治時代

番付に登場する呉服屋などの長者たちが「首引き」遊びをしている様子。

池田屋 対 伊勢吉	高崎 対 木場鹿嶋	えひすや 対 田端屋
鹿嶋 対 鴻磯	中条 対 竹原	小津 対 柏屋
大六 対 丁吟	井善 対 三ツ井	田庄 対 石町大三
三谷 対 仙波	よしや 対 キイ	



### 色々な見立番付

全国の名産品や地域の料理屋などのランキングが「見立番付」として数多く出され、当時の人気のある製品や店が人々の間で知られていたことがわかる。

「大日本産物相撲」  
911848